

今週の為替相場見通し(2021年4月5日)

総括表		先週の値動き			今週の予想レンジ
		注	レンジ	終値	
米ドル	(円)		109.38 ~ 110.97	110.59	109.00 ~ 112.00
ユーロ	(ドル)		1.1704 ~ 1.1795	1.1752	1.1650 ~ 1.1850
(1ユーロ=)	(円)		128.85 ~ 130.30	130.18	129.00 ~ 131.00
英ポンド	(ドル)		1.3707 ~ 1.3853	1.3825	1.3650 ~ 1.3900
(1英ポンド=)	(円)	*	150.59 ~ 153.20	153.16	152.00 ~ 155.00
豪ドル	(ドル)		0.7533 ~ 0.7664	0.7591	0.7450 ~ 0.7650
(1豪ドル=)	(円)	*	83.34 ~ 84.49	84.17	82.50 ~ 85.00

(データ)先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、*印の項目はブルームバーグ。

1. 米ドル

市場営業部 為替営業第二チーム 甲斐 貴之

(1)今週の予想レンジ: 109.00 ~ 112.00 円

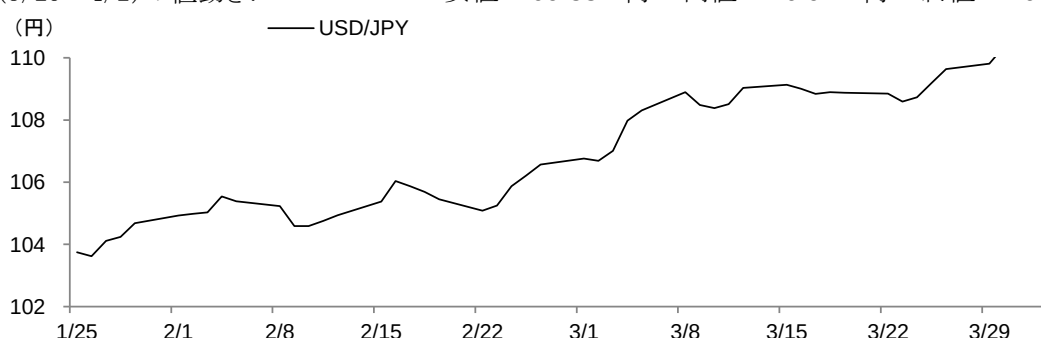
(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のドル/円相場は週後半上昇し、年初来高値を更新する展開。週初29日、109円台後半でオープンしたドル/円は、米ヘッジファンドの取引でデフォルトが発覚したことや国内の輸出企業による年度末の円買いにより一時週安値となる109.38円まで下落した。しかし米国時間に入り米金利が上昇するにつれ、109円台後半までじりじりと値を戻した。30日は、バイデン政権のインフラ支出発表を前に米金利が上昇し、ドル買いが強まると、ドル/円は110円台前半まで上昇した。31日にかけてもドル買いフローや米金利上昇もサポート材料となり、ドル/円は一時年初来高値となる110.97円をつけた。その後は上昇が一服し、米3月ADP雇用統計や米2月中古住宅販売仮契約の市場予想を下回る結果に、ドル/円は110円台前半まで下落した。1日には、実需のドル買いが入る動きに、ドル/円は110円台後半まで上昇した。その後も米3月ISM製造業景気指数の結果などが好感されて底堅い値動きとなった。2日には、イースター休暇で市場が閑散な中、ドル/円は110.38まで下落。その後、米3月雇用統計が市場予想を上回る結果となり、再び110.75円まで上昇した。その後は横ばいとなり、110.50円台で越週した。

今週のドル/円相場は緩やかに円安が進展しつつもレンジ相場となる展開を予想する。今後もコロナの感染縮小と好調な米経済指標を確認する中で、緩やかに米金利上昇と円安が進展すると思われる。ただし、既にバイデン政権によるインフラ支出が8年で2.2兆ドルと公表するなど、金額や期間が見え、その実行時期などに関心が移る中では、一段の金利上昇やドル高は見込みにくく、しばらくはレンジ感が強まると思われる。重要指標の発表は5日(月)に米3月ISM非製造業景況指数、7日(水)に米2月貿易収支、米FOMC議事要旨(3月16-17日開催分)、8日(木)に日2月国際収支、日3月消費動向調査、9日(金)に米3月生産者物価指数の発表が予定されている。

(3)先週までの相場の推移

先週(3/29~4/2)の値動き: 安値 109.38 円 高値 110.97 円 終値 110.59 円



(資料)ブルームバーグ

2. ユーロ

市場営業部 為替営業第二チーム 天雲 遊也

(1) 今週の予想レンジ: 1.1650 ~ 1.1850 129.00 ~ 131.00 円

(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のユーロ/ドルは下に往って来いの展開となった。週初29日は、1.1788でオープン後、イタリアが今年のGDP予想を6.0%から4.1%に下方修正するとのヘッドラインに上値重く推移。その後、一服感があった米金利が上昇する動きにドル買い優勢となり1.1760近辺まで下落。30日は、バイデン政権のインフラ投資の発表への期待感、ワクチン接種の進展に伴う経済回復期待から、米金利が上昇する動きにじりじりと値を下げ1.1711まで下落。31日は一時値を戻す場面もあったが、フランスで全国的なロックダウンを検討するとの報道に再度下落に転じ、一時週安値である1.1704をつける。しかし、ロンドンフィックスにかけて期末のリバランスに伴うドル売りが強まることで1.1760まで戻す。その後はマクロン仏大統領が1か月のロックダウンを正式に発表すると再度1.17台前半まで下落した。1日は、欧米株式市場の堅調推移を好感したユーロ/円の買いがサポート材料となり1.1780までじりじりと上昇。2日は、イースター休暇につき流動性も枯渇する中、前日の流れを引き継ぎ高値圏で推移し一時1.1787をつける。しかし、米3月雇用統計にて非農業部門雇用者数変化(NFP)が予想対比大きく上振れる結果に1.1750近辺まで下落。一巡後は薄商いの中、1.17台半ばで方向感なく推移し、1.1752で越週した。尚、ユーロ/円は週初129.36円で始まり、じりじりと上昇し 130.18円で越週した。

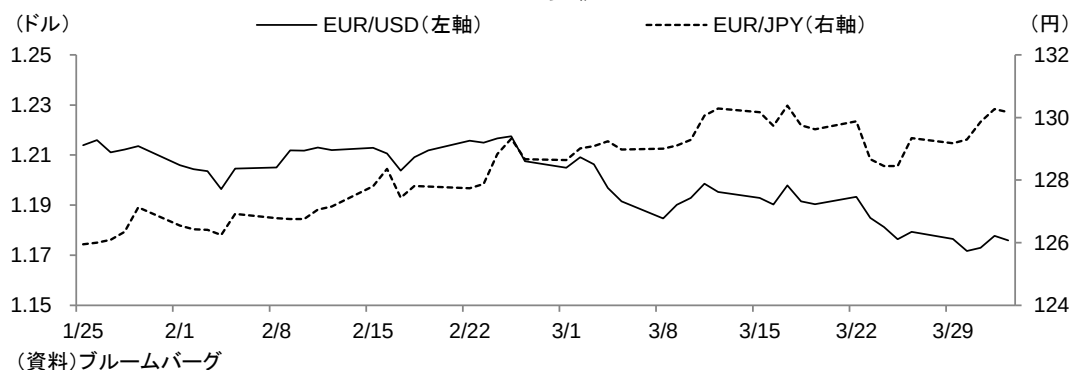
今週のユーロドルは、欧州圏におけるコロナウイルスの感染拡大懸念、欧米金利差を意識したドル買いを要因に軟調推移すると予想。ドイツではアストラゼネカ製ワクチンについて、血栓症の症例が新たに複数件報告されたことを受けて60歳未満の接種停止を決定。フランスでも全国的なロックダウンを実施する等、第3波への警戒感も高まり経済停滞懸念は依然として燦る。対照的に米国では、バイデン大統領が米国民の成人の9割がワクチンの接種を受けられる体制が整っていると発表する等、ワクチン接種は順調に進んでいる状況。このようなワクチン接種状況の違いがユーロの下押し圧力となるであろう。また、先週は米国の経済回復期待から米金利が上昇しドル買い優勢となる場面が目立った。FRBは足元の金利上昇を容認する発言をしており、しばらくは米金利の上昇が継続するだろう。相場動向のドライバーが需給から金利差へと変化する中、欧米金利差を意識したドル買いによりユーロドルは弱含む展開になるだろう。心理的節目である1.1700を抜けるかどうか注目したい。尚、今週の主な経済指標として、5日(月)にユーロ圏2月失業率、6日(火)にユーロ圏3月サービス業PMI(確報)、7日(水)にユーロ圏2月PPIの発表を予定している。

(3) 先週までの相場の推移

先週(3/29~4/2)の値動き:

(対ドル) 安値 1.1704 高値 1.1795 終値 1.1752

(対円) 安値 128.85 高値 130.30 終値 130.18



3. 英ポンド

欧州資金部 本多 秀俊

(1) 今週の予想レンジ: 1.3650 ~ 1.3900 152.00 ~ 155.00 円

(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の英ポンド相場は、上昇。対ドルでは方向感に乏しい上下動を繰り返し、週を振り返って小幅水準を切り上げるにとどまったが、対円、対ユーロではほぼ一方的な堅調推移を支配的とし、とりわけ対円では明確に水準を切り上げた。米欧主要市場は、3～4日に前後して復活祭の連休で動意に乏しく、この間、主要通貨市場では、唯一、米長期金利動向が取引の手掛かりを提供していたように見えた。週前半には、バイデン米大統領による大型インフラ投資計画に対する景気押し上げ期待感などが米長期金利を押し上げ、それを追い風としたドル全面高が進んだ。とりわけ、市場から「金利上昇余地に乏しい」と見做された円の下押しが顕著で、対ドルだけでなく、対ポンドも含め、円は一貫して全面安を続けた。米長期金利は30日に1.77%台まで上昇したが(10年物国債利回り)、その後は頭打ちから水準を切り下げ、並行して、ドルも、ポンドやユーロに対しては軟調に転じた。英固有の要因では、29日に英中銀金融政策委員会のブリハ委員が、「力強い成長を示す数字を2四半期ほど見たとしても、それが金融政策による景気刺激を引き上げる理由にはならない」と、足下金融緩和策からの拙速な転換をけん制する発言をしたこと、31日に発表された英10～12月期GDP(確報値)が前期比+1.0%から同+1.3%に上方修正されたことなどが目を引いたが、いずれも、ポンドを含む英金融資産(株、英国債など)に目に見える影響を与えた様子は読み取れなかった。

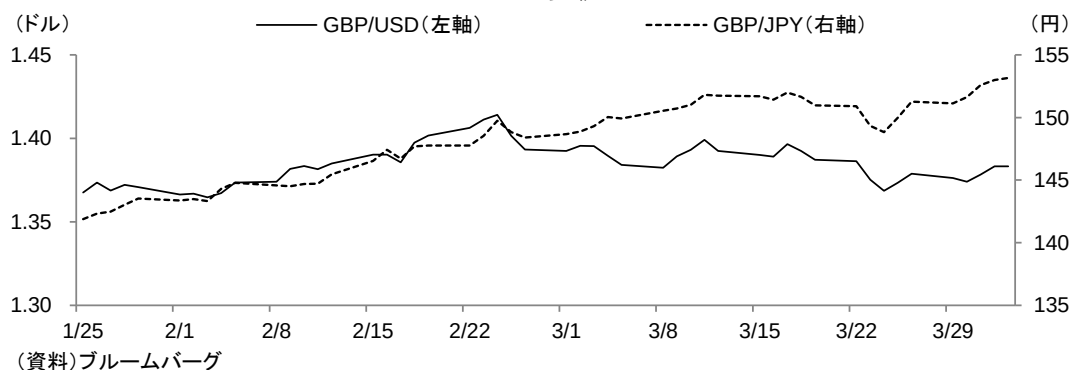
今週の英ポンド相場は、方向感を欠いた膠着を中心に、敢えて選ぶなら対ドルでは軟調を、対円、対ユーロでは堅調を予想する。上述の通り、現在の主要通貨市場では、唯一の材料が長期金利動向(長期金利格差)で、景気動向そのものや、金融政策動向などに対する関心は極めて低いように見える。ドル堅調を見込むのは、今後も米の長期金利上昇基調が継続すると見込むからであり、円やユーロの軟調を見込むのは、逆に、今後も日、ユーロ圏の長期金利上昇余地が乏しいと見込むことでもある(ポンドの立ち位置は、その中間)。米と英との共通点は、新型コロナウイルスに対するワクチン接種が明確な進捗を見せている点に見出せる。米と英の違いは、追加財政刺激に対する積極的/消極的の違いに見出せる。そのいずれも欠けているのが、日、ユーロ圏という捉え方もできよう。世界中のありとあらゆる経済が、グローバルなサプライチェーンに組み込まれた現代にあって、ワクチン接種の進捗は、一国の問題にとどまらないはずだが、それはあくまでも中期的な目線であって、他に目ぼしい材料が見当たらない現状で、市場が殊更材料視するのはやむを得ないのかもしれない。財政支出は、景気押し上げ要因と同時に、物価押し上げ要因という負の側面も持つはずだが、現状、それは長期金利上昇と言う形でむしろ通貨高要因と読まれるようだし、いずれは利上げ要因として、やはり通貨を押し上げる可能性も想定できよう。英政府は、5日(月)、翌週(12日～)以降の行動制限措置に関する決定/発表をする予定だが、当初計画通り戸外での飲食店営業などに関する制限が緩和されることになれば、ポンドが好感して上昇する可能性も考えられよう。ポンド/円は、16年6月の英国国民投票後の急落からの戻り高値(18年2月の156.61)に手が届く水準まで上昇しており、いずれ同水準を試しにくい可能性は低くない。ただし、仮に同水準を上抜けた場合、ブレクジット投票以前の水準を回復することになり、その後は同水準に定着する可能性よりは、達成感からの調整安を見る可能性の方が高いものと見込む。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(3/29～4/2)の値動き:

(対ドル) 安値 1.3707 高値 1.3853 終値 1.3825

(対円) 安値 150.59 高値 153.20 終値 153.16



4. 豪ドル

アジア・オセアニア資金部 シドニー室 安藤 愛

(1) 今週の予想レンジ: 0.7450 ~ 0.7650 82.50 ~ 85.00 円

(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の豪ドル相場は先週に引き続き下落が継続(4月1日現在)。29日、米ヘッジファンドの損失問題を巡る警戒感から株価が軟調となる中、序盤は小安く推移。NY州知事が4月6日から全ての成人がコロナワクチンの接種が可能になると発表すると、米金利上昇・米ドル高の反応で、豪ドルは一旦0.76台前半まで値を下げたが、堅調な株価を背景にすぐ値を戻し、0.7630近辺まで回復。30日、前日の米金利上昇の流れを引き継ぎ豪金利も上昇。豪ドルは買いが優勢となり一時0.7660近辺まで買い進まれた。NY時間には翌日のバイデン政権によるインフラ計画発表が意識され、米10年国債利回りが1.75%を超えて上昇するのを横目に、ドル/円が1年振りに110円を突破。この流れを受けて豪ドルは一時0.7585近辺まで下落した。31日、豪2月住宅建設許可件数が市場予想を大幅に上回ったことや中国3月非製造業PMIが強い結果だったことなどが支援材料となり、一時0.7640近辺まで上昇する局面もあったが、仏ロックダウンの報道を受けてリスクオフの流れとなると、売り戻されて0.76近辺まで下落。1日、この日発表された豪3月住宅価格は30年ぶりの高い伸びを記録するも、豪ドルは反応を示さず。その後、特段材料が無い中売り優勢となり、ストップロスを巻き込みながら一時0.7533まで下落した。

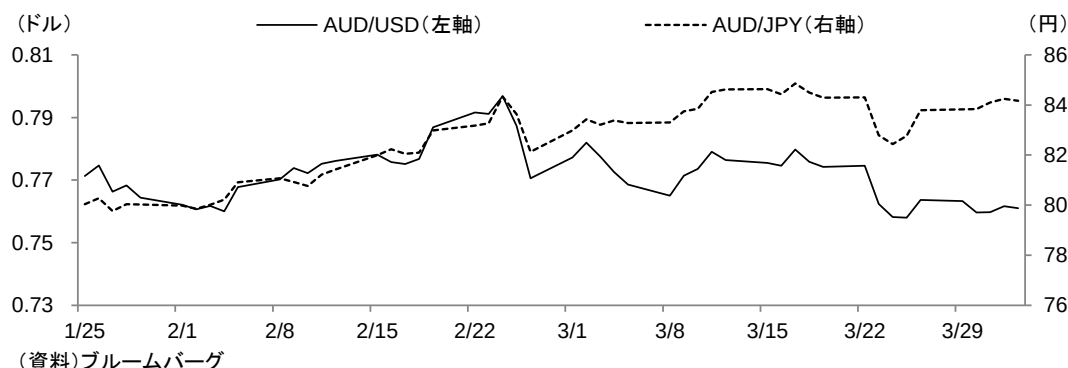
今週の豪ドル相場は下値固めの展開を予想する。足元の豪ドル調整局面は米金利高を背景とした米ドル高が主導しており、この流れが一服するまでは豪ドルの頭が抑えられる可能性がある。昨年以降特に米株価と高い相関性を示していた豪ドルだが、3月中旬以降その相関性が崩れてきている。NSW北東部でコロナ感染者が出たことを受けNSWの一部で再び規制強化を実施したこともリスクムードの重しとなっている。来週は6日にRBA理事会が予定されている。今次理事会では特段の政策変更は見込まれていないが、(可能性は低い)タカ派的な材料が出てくれば豪ドル上昇のきっかけとなる可能性もある。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(3/29~4/2)の値動き:

(対ドル) 安値 0.7533 高値 0.7664 終値 0.7591

(対円) 安値 83.34 高値 84.49 終値 84.17



当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。